

思出、感想、それから遺稿、手紙、等をかき集めて上梓し樋口君の靈に捧げたいと考へて居ります、そして又故人の知己に御わかち致したいと考へて居ります、付きましてはさうぞ皆様六月三十日迄に長野縣須坂町上高井郡農會内尾見祐八宛御投稿下さる様伏して御願致します。

説苑

富士絹に就いて

上田蠶絲専門學校 杉 木 政 義

絹紡絲云へば、富士絹を聯想し、富士絹云へば、絹紡絲を聯想する程、兩者の間に切つても切れない、深い關係がある。云ふ譯は、絹紡絲の大部分は富士絹の原料として使用せられるからである。富士絹は絹紡絲の特色を以つて生命としてゐるからである。更に語を換へて云へば絹紡絲は富士絹に依つて立ち、富士絹は絹紡絲の價格の如何に依つて他の織物の販路を極度に獲得もすれば又極度に侵略もされ易い。此の傾向は何の織物でも大なり小なり存するけれども富士絹に於いては殊に甚しきものを見る。

一體絹紡絲を製造する絹紡績は原料を内地に仰ぐ唯一の紡績業であり、小なりと雖も世界の絹紡績總産額の大部分を占むる所に我が國として見逃す事の出来ない意義がある。全時に我々としての使命があり、富士絹を詮索する必要

があるのである。故に絹紡績の現状の一端を述べる事も富士絹の説明の敷衍にこそなれ、決して無駄ではないと思ふ。絹紡績は養蠶製絲の廢物である屑物を以つて原料とする事や原料は我が國輸出の唯一の弗箱である生絲の産額と密接なる關係のある事は茲に述ぶるべく餘りに悉知の事柄である。従つて生絲年々の増額は養蠶製絲の發展を意味し、絹紡績の發達を促し絹紡績増額の主因を構成するといふ事も亦贅言として葬むらるべきであらうか。

我が國屑物の産額は統計を引用し適確なる數字を以つて表示する事はその内容複雑にして困難なる嫌ひあるが爲殆んご之を見ずして様々に謂はれてゐる。即ち四百五十萬貫或ひは三百五十萬貫等。然し乍ら四百萬貫見當はこれ等の數字から見て當らずと雖も遠からざる所ではなからうか。

その約四分の一は輸出品として海外に運ばれてはゐるけれども、隣邦支那の蠶絲業の改發は年々本邦への輸出を増し結局内地原料の全額を所理してゐる状態である。而してこの原料より生産されたる絹紡績産額は月七千五百俵と稱せられ年産額九萬俵即ち百八萬貫にして原料に對する計算上平均製絲歩溜は約廿七パーセントに相當する。

その用途は茲に述べんごする富士絹は謂ふまでもなく、銘仙縮緬はその主なるものであつて續いて蒲團地、天鷲絨、縫絲、刺繡絲、なき亦その用途として見るべきものである、これ等の製品に使用せられる最近の數量は輸出向富士絹用原絲として月約十萬疋分一疋五百八十匁平均と見たならば四千八百二十俵、殘餘の二千六百八十俵は内地向消費として使用せられ内地用富士絹とこの中に包含される事は勿論である。

或る種の報告に基づきこの數量を消化する諸機業地に割當れば大體次の如き見當となる。

伊勢崎地方	一千俵	足利地方	七百俵
桐生地方	百俵	八王寺地方	三百四十俵
秩父地方	七十俵	所澤青梅地方	五十俵
米澤地方	五十俵	京都附近	五十俵

長崎地方 七十俵

栃尾十日町附近 五十俵

丹後縮緬その他縮緬用 百俵

其他マバラ用 九十俵

以上の表により各機業地の生産織物状態とその生産數量を、考査せば如何なる種類の織物に使用せられてゐるかの概略を覗ふ事も左程困難な事ではないと思ふ。

更に輸出向内地向の區別を避け全富士絹の産額は昨年度に於て多い時には十三萬疋と稱せられてゐる。而して日本絹織二萬疋、鐘淵紡績一萬疋、富士瓦斯紡績五千疋、大日本紡績、日東紡績、二千五百疋、日本絹織、一千疋の絹紡績諸會社の生産額を控除せば他は福井、金澤、大聖寺、岐阜の各機業地はその主なるものである。

輸出は明治四十二年頃より始まりその後弗々行はれ大正十一年を以て格段の増加を見、引續き今日に及んだものである。その輸出先の主なるものは濠州であつてカナダ英國これに亞ぐ。今過去三ヶ年の輸出状態を示せば次の如くである
即ち

	大正十四年	大正十五年	昭和二年
濠州	一七、三八二千四	一九、〇六〇	二〇、〇三六
カナダ	三、五一八	四、七四二	六、六七六
英國	三、九五四	三、九二二	五、二二三
印度	一、八二七	一、八二一	二、〇五〇
喜望峯南阿	三、三四六	四、二六〇	三、六六七
フィリッピン	六六九	八〇七	一、五五二

新西蘭 九七一 八三六 三九九

其の他 一、九五五 二、五二八 二、六七九

合計 三四、〇一〇 三八、一六一 四四、四六三

此の表に示す如く昨年度富士絹輸出額は四千四百四十六萬三千圓にして、その數量百八萬二千疋、内七十九萬五千疋は神戸より、二十八萬七千疋は横濱の輸出にして十二萬疋の輸出を見たる月もあれども、各月平均輸出額は九萬疋強に相當してゐる。

富士絹の起原に就いてはその文献少なく従つて詳ならざる點多々あれども、明治二十年頃絹紡絲を應用し平織生地製織の試は最も古きものであつて明治二十六年大阪の博覽會に出品されたる經生絲緯絹紡絲の絹紡羽二重絹モスリンを稱せるものは今日の富士絹の基をなすものと認むる事が出来る。

降つて明治三十五年の都絹は、富士紡の絹紡絲を用ひて製織されたるものにして、一方富士絹に於ては生絲を經に絹紡單絲を緯に、廣巾羽二重の研究を行ひ英百五十番を以て十七臺の織機を運轉したと云はれてゐる。これは明治四十一年頃であつてその製品たるや羽二重の擬品と稱せられ、又それを目的とせるが爲甚だ不評判に終つたのである。

然しその後種々研究の結果絹紡絲を、絹紡絲の使命ある處に生かしめんとし絹紡雙絲のみを以つて一つの平織を製織した。今日の富士絹は斯かる履歴の下に始めて生れ出でたるものである。

最初經佛二百八十番、雙絲緯二百番雙絲、を用ひしものを五號として販賣し世評に質し富士絹と登錄した。富士絹なる名稱は明治四十三年、茲に始めて起つたのである。その後經英百三十五番雙絲緯佛二百番雙絲を用ひし九號を出し續いて十號の出現を見た。かくして富士紡の富士絹として大正五年頃迄殆んゞ獨占の形をなし富士絹を今日にあらしめたる主因をなすものである。

富士絹の富士絹としてその獨占時代は富士絹なる名稱にて一向差支へなく、その生産額も今日に比し微々たるもの

であつたが輸出富士絹の發展と共に富士絹に類する絹紡織布の製織次第に増加し、先づ富士絹に對抗する鐘絹平絹が鐘紡から登録せらるゝに至り、富士紡以外の會社は之と同様の絹紡織布を製織しても富士絹とする事は富士紡の商標權を侵害するものなりとして不二絹として販賣した。其後に至り税關に於ける登録も富士絹を以つてこの種の織物の普通名稱として使用し、一般に對しても富士絹として差支へなき旨の通牒を發する有様にて商標權の侵害云ふ問題も、別に惹起しなかつた。然るに之れを反對の現象が昨年末に起つた。即ち夏季の間十萬疋の輸出を見たものが十月十一月の九萬疋に減少するに及び輸出品の一部を内地消化に向けて内地消費力を増大せしめる關係上、富士絹の宣傳の必要を感じた。然るに茲に名稱問題に於て富士絹なる名稱を以つて全般的とする事は異議ありと提唱するものが起つた。しかもそれは優力なる大會社の主張であつたが爲議論百出云ふ有様である。

一體富士絹は羽二重に出發し、本邦絹織工場は殆んゞ羽二重を根底としたものである。従つて生絲を以つて製造する羽二重には蠟はなくてはならない糊料である。然るに北陸地方の富士絹製造業者は羽二重の不振より轉業せるものであるが爲蠟を糊料とする事に躊躇しなかつた。寧ろ蠟を使用せざれば、毛羽の多い絹紡絲を以つて製織する事にはかなりの困難が伴ふ爲絶對的にその必要を感じたるものである。然しながら蠟は富士絹の最大禁物にして此れの使用は最も嫌ふべき方法である。如何きなれば蠟は絹紡絲の纖維内に混入し製織されたる富士絹より洗滌作用に依つてこれを除去する事は不可能な事である。のみならず水に對しては忽ち凝固して外部からの水分を排除する防水作用を有する爲、後日の加工に影響し従つて染色光澤等を害するものであるからである。

その後大正九年に金澤、赤座工場に於て蠟の使用なくとも立派に製織し得るに至つてから格段の發展を見るに至つたものである。現在市場で評價される主なる銘柄は、鐘紡の鐘絹、平絹、富士紡の五號、十五號、三十號、三十五號、大日本紡のS W、M S、扶桑日本絹織のP K、スリーダイヤ(三菱)地球、M S、日本絹K、R、N、日本絹綿の浪花絹、辨慶絹、金澤丸三印十五號三十五號赤座のA P、酒井工場のS印福井の青判赤判桐生地方のO K、D T、羽衣、大川、等がある。

而して赤判格以上のものは、鐘紡の平絹、富士の十五號、S Wの二百號、扶桑P K、S印十號等であつて、赤判格及び多少の値鞘のあるものは、A P十五號、三十號、丸三印十五號、S印二十號、福井赤判等がある。更に青判格及び若干値鞘を有するものは、福井の青判を始めし三菱丸三印の三十五號S印の三十號等がある、勿論之れは時々變更する性質のものである。之等の富士絹はその價格に依つて強弱二様の内容を有してゐる。即ち或る時は羽二重に擊退せられ、ある時はモスリンの逆襲に遭遇して兩者の狹撃の下にある状態である。

然しながらこれは一方面の見方であつて、反面よりよく考案する時は反つて兩者に向つて擁撃し得る立場である。初めは羽二重の模倣品として立つたけれど加工整理に於て太刀打ちならず、モスリンを襲ひつゝ辛うじてその販路を維持してゐた。従つて富士の五號がモスの赤番と比較されるに云ふ状態であつて久しく續いたものである。

然るに最近モスリンの需要も都會より離れんとする傾向あり多少落日の感なきを得ず漸次田舎落の形にある。この惠まれたる機に於て富士絹の特色を發揮し他の追従を許さざる安固たる地盤に立つ事が特に必要である。

富士絹の特色とする處は羽二重の如く高價ならず觸感柔らかく、肌觸りよく、しかも洗濯に對しては羽二重の如く褐色を帶び或ひは光澤を失ふ事なく、反つて或る種のもは更に光澤を増し耐久力に富んで所謂經濟的なる意義に叶ふ處にある。尙モスリンの如く蟲害に對する憂ひなく絹特有の優美なる光澤を保有し益々世人の趣好に投せられんとする傾向がある。

殊に最近絹紡絲の低價は富士絹の低落を誘ひ、一ヤード六七十錢臺を唱へ甚だしきは小巾尺二十錢賣りの廉賣品があるに云ふ有様で益々富士絹の需要を増し消費量の増加を促してゐる。従つて大量生産の合理化に價格を低廉ならしめ得る可能性のあるのみならず我が國の服裝の過渡期はより幸を齎らすものではなからうか。

即ち本邦古來の日本服より洋裝に眼覺めんとし時代の潮流と共に變化せんとしてゐる。従つて吳服系統の富士絹の販路は更に進んで洋反物系統の需要を増し引いては海外市場のその方面の需要に猛進せんとする氣構へある事を忘れては

ならない。幸ひ昨秋以來富士絹の友禪染の需要を喚起せし事は獨り富士絹に止まらず國産振興の上からも慶賀すべき事であつて、染色業者を提携してその柄行が海外市場に投じたならば一段の進展を見る事も亦明らかなる事である。

茲に顧慮すべき事は品質の如何である。價格の低廉勿論結構であるが只だそのみに囚はるゝ時はその反動亦恐るべきものを覺ゆ。殷鑑遠からずモスリンの需要喚起は價値の廉なるにあり、價格の低廉は品質を斯瞞し爲に一般消費者の鑑識眼を失はしめ耐久力の缺乏から次第に世人の趣好から離れんことを自繩自縛の形にある。

昨年末富士絹輸出の低落も亦この轍を踏める痕跡莫きにしても非ざるを知らば富士絹の爲、絹紡糸の爲斯業に關係ある人々の反省すべき所あるを充分齎味して頂きたいものである。

桑葉及び繭の生産費に就て

栃木縣廳農商課 青木 針三郎

本縣養蠶組合聯合會の事業とし、縣内十六組合を撰定し經營の規模大中小各三十二名宛計九十六名の養蠶家に付き、大正十五年三月より引續三ヶ年に亘り經濟調査を爲し自分等が主として此の調査を爲したるを以て其の成績の中より桑葉の生産費及び繭の生産費に就て以下少しく述べて見度いと思ふ。

調査の基礎

調査は凡て大正十五年の實際の支出入に重きを置いたのである、昭和元年の分は目下取纏中である。

1、桑園經營費

桑園經營費は桑園一反歩を單位とし之に要する小作料、肥料代、勞賃、租稅諸掛、雜費の五項目の合計を以てす